

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2026・7・30



会のホームページの改定を行いました。10年ぶりの初めての情報更新でした。ご覧いただきましたか。

会の沿革の作業では、10数人で立ち上がった会が60代の方がほとんどだったこと、その後、ザリガニ釣り大会がクチコミで知られていき、お子さんとともに30代、40代の方々も入会されるようになり、会員数も40人、50人と増えていったことや、田んぼとの関わりで田植えや稲刈りなどもプログラムに加わると更に会員数は増えたとこと、そして、コロナ禍を迎えた時に、初めての20代の若者が新会員に加わって以降、大学生、高校生も名前を連ねるようになり、多世代によるめだかサポーターの会に変貌しました。SNSやYouTubeもそれぞれ管理を任せられる会員の手で日々、情報が発信されるようにもなりました。LINEの効用なども見逃せません。瞬時の情報共有に大変役立っており、道具としてのデジタルの恩恵は大きなものです。さまざまな企業、学校、市民団体など外部とのパイプも広がったこの10年でしたね。ホームページ改めて閲覧ください。



その10年間は横目で「工業団地化計画」を注視しながらの活動でした。1次計画（県道向こう側の鬼柳地区）は終了し、今は、我々の主活動エリアの桑原地区を対象とした2次の計画の準備が進められています。既報のように、100人ほどの地主さんたちの9割は田んぼを売却しても良いというアンケート結果が出ています。ただアンケートはもう一つ踏み込んでいて、その9割の人のうち6割は「この農業景観は残して欲しい」という回答も。つまり、工業団地が出現するのに賛成で田んぼの処分というわけではないのですね。そうしたことを踏まえたうえで、市のプロジェクトチームが立ち上がり、これからの桑原地区の農業の在り方、開発との折り合いの度合い等についての議論が重ねられています。（最新の活動報告でお知らせしています）生物相調査も行われ、改めて貴重な生態系が守られていること、メダカの遺伝子にも交配はなく、酒匂川水系のメダカの在来性が守られていることも判明しています。環境省による「自然共生サイト」としての認定、国の自然保護協会による小田原市の「ネイチャーポジティブ都市」との認定など、生態系保全に向けた良い風も吹いています。また、10月開催のCOP17では（アルメニア）「おだわらめだかの郷」が自然共生サイトとして世界に紹介されるニュースも飛び込んできました。プロジェクトチームにも、この桑原地区が、メダカだけではなく貴重な生物多様性に恵まれた土地であり、いくつかの企業や学校なども稲作に関わるようになっており、「めだか米」という地産のブランドが生まれている場所、またたくさんの市民が各種イベントを通して集まるエリアとなっていて、環境保全の象徴的な存在という認識があります。休耕田を引き受けるという市民グループもいくつか生まれています。「水田環境が保全され、農業が継続されていく」桑原の新しい姿を描くことにチャレンジしているはずです。工業化プロジェクトは、しかし民間の手に委ねられています。開発事業主が、現在のネイチャーポジティブの世相を振り切って土地の買収、造成と進む可能性もゼロではありません。そのときに、管轄者である小田原市が指導できるかどうか、プロジェクトチームの明快なプレゼンテーションが待たれます。

桑原の新しい姿をどう描いたらよいのか。